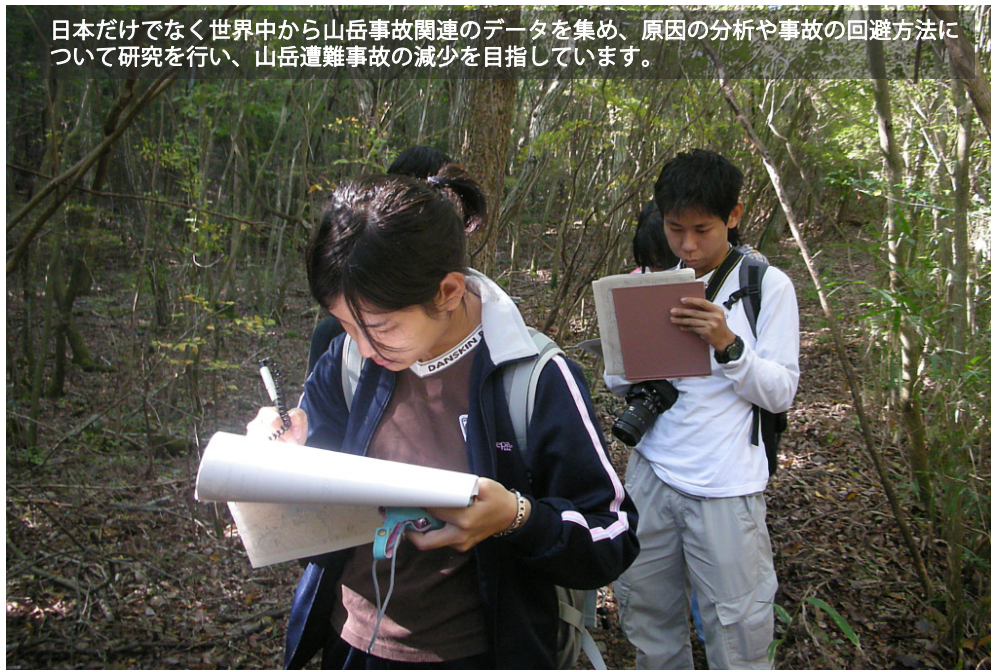


山岳遭難事故を減らす

日本だけでなく世界中から山岳事故関連のデータを集め、原因の分析や事故の回避方法について研究を行い、山岳遭難事故の減少を目指しています。



道迷いに関する空間認知能力検定試験

活動の概要

目 的	山岳遭難事故のデータベースの分析ならびに山中での現場実験を行い、遭難のメカニズムを明らかにする。そして、各種山岳団体と協力して、事故防止対策活動を行い、事故を減少させること
連携メンバー	日本山岳文化学会 / 一般社団法人日本登山医学学会 国際山岳連盟 (UIAA) / 公益社団法人日本山岳協会とその支部 (大阪府山岳連盟 / 兵庫県山岳連盟) 日本勤労者山岳連盟とその地方連盟 (大阪府勤労者山岳連盟 / 兵庫県勤労者山岳連盟) 日本山岳サーチアンドレスキュー研究機構 関西大学総合情報学部教授 青山千彰
活動地域	日本全国ならびに世界の主な登山団体 (UIAA加盟国)
活動期間	1992年～ (継続中)

連携の経緯

全ての山岳遭難事故には、理由と原因がある。しかも事故の発生は、一見単純に見えても様々な要因が絡み合う複合型が多い。事故を解析していくとヒューマンエラーと疲労等の関係において、事故内容の類似性も見いだすことができるが、誰も研究している者がいない分野であった。そこで青山は、事故データベースを構築して解析を行い、そのメカニズムに関して言及すると共に、事故防止対策に関して現場との共同研究を実施することになった。

解決すべき課題

- (1) 日本の山岳遭難が漸増傾向にあり、今後も増えることが予想されること
- (2) “山岳事故が起こる状況のイメージ”と、“実際の事故が発生した状況”とは大きな乖離があるため、その差を払拭すること



「やぶ」の中で、どう迷い、遭難するのか検証実験

救助法の開発事例：風により狭まる「助けて」救助要請の声

大学の役割

山岳遭難事故は、毎年約3,000人が遭遇し、300人近くが亡くなっているにもかかわらず、世界的にも研究者がいない分野であった。死亡事故であっても、事故の状況、原因などの情報が十分に掴めていないケースが多く、遭難対策活動の担保として満足な状況とは言えない。

青山は、日本山岳協会や日本勤労者山岳連盟の協力を得て、事故のデータベースを構築し解析を行った。その結果、事故発生の特徴は、明らかに危険な場所や厳しい天候などの状況下では少なく、大半は一見安全な場所で発生するという事実をデータで明示することができた。

しかしマスコミが取り上げる山岳事故は、雪崩による遭難など、大規模なものが目立ち、小さな転倒や「道迷い」による遭難が報じられることは少ない。ここにイメージの落差が生まれる。山岳事故は、他の事故と同様に、大多数はヒューマンエラーと呼ばれる人為的なミスが原因で起こることを登山者に認識してもらうため、セミナーやシンポジウムでの啓蒙も行っている。

調査結果が、安全登山活動や安全登山教育、レスキュー活動に寄与し、減遭難活動に重要な役割を果たすことを目標に研究を続けている。

成果

- (1) 経験則などでのみ語られていた山岳遭難事故を詳細にデータ化し、メカニズムを解析
- (2) 山中での現場実験による登山者能力測定と遭難防止
- (3) 世界遭難事故データベースを標準化

今後の展望

- (1) 世界規模での山岳遭難事故データベースの構築
- (2) 第三者事故調査法の策定
- (3) 日本における、登山者のあるべき姿を示す登山倫理の制定と普及

研究者の紹介



総合情報学部 教授
青山 千彰
(あおやま ちあき)

専門は危機情報論。全国の大学で唯一、山岳事故の研究を行う。現在重点的に取り組んでいるテーマは、世界規模での山岳遭難事故データベースの構築、空間認知能力と道迷い問題、事故調査法の開発と世界標準化、登山倫理の体系化など。日本だけではなく世界中から山岳事故関連のデータを集め、事故原因の分析や事故の回避方法について研究を行っている。
国際山岳連盟UIAA委員、日本山岳協会遭難対策常任副委員長、日本勤労者山岳連盟顧問、日本山岳SAR研究機構会長、日本山岳文化学会理事、日本登山医学学会評議員。